

SHOW HEY シネマールム

★★★★

再見～また逢う日まで～

(我的兄弟姐妹/ROOTS AND BRANCHES)

2001年・中国映画・95分

配給/シネマパリジャン

2003 (平成15) 年11月24日鑑賞

<梅田ガーデンシネマ>

Data

監督・脚本：俞鍾 (ユイ・チョン)
出演：梁詠琪 (ジジ・リヨン) / 姜武 (チアン・ウー) / 夏雨 (シア・ユイ) / 陳實 (チェン・シー) / 崔健 (ツイ・ジェン) / 張建新 (チャン・チェンシン)

👁️👁️ みどころ

再会をテーマとした名作は多いが、この映画は中国でしかつくりだすことができない再会のストーリーで、01年6月中国で公開されるや大反響を呼んだ作品。音楽家の父とやさしくて気丈な母を持つ4人兄弟たちを襲った突然の不幸。しかし20年後の今、アメリカで音楽家として成功し、中国に凱旋帰国した長女を中心に兄弟たちの再会が遂に現実のものに……。ハンカチ必携の感動作。

<原題と邦題>

この映画の邦題は『再見～また逢う日まで～』だが、原題は『我的兄弟姐妹』(ROOTS AND BRANCHES)。

「再会」を中国語で読めばツイツェン。日本読みとよく似ているからすぐに覚えられる単語。これを機会に是非ひとつ覚えておこう。

<中国版「再会」のキーワードは？>

再会というテーマは、洋の東西を問わず、ドラマティックなストーリーが多く、また涙を誘う感動的なものが多い。他方、現実問題としては1930年代に発生した不幸な「日中戦争」の影響によって、親子、兄弟をはじめとする親族の生き別れ問題が発生し、今でも戦争孤児問題は尾をひいている。従ってその人たちの「再会」のニュースが流されると、何となく心が熱くなってくることがある。

この中国映画の「再会」のキーワードは音楽。すなわち音楽家の父親が語る「辛いことがあっても、音楽があれば淋しくないさ」という言葉がキーワードだ。そして中国版「再

会」となれば、やはりそこには文化大革命の影が……。そう、小学校の音楽教師をしている父（崔健 ツイ・ジェン）は、今は母（張建新 チャン・チエンシン）と4人の子供たちと共に過ごしているが、かつては才能豊かな音大の優等生で将来を嘱望されていた人物。しかし何らかの問題を起こしてこの僻地にやってきたのだ。そして今また校長先生からの呼出しを受けた父は、「正式教員になれるのでは？」という期待とは全く逆に、その思想上の問題によって音楽教師をクビになってしまった。

<4人の子供は男、女、男、女>

4人の子供たちの名は、上から順番にイクー（男）、スーティエン（女）、ティエン（男）、ミャオ（女）。「貧乏人の子だくさん」とはよく言ったもので、日本でも中国でもそれは同じ。「ひとりっこ政策」がとられる以前の中国では、多分どこでもこんな姿だったはずだ。この映画では、長女のスーティエン（当時7才）の目を通して、現在進行中のストーリーと20年前の思い出のストーリーが交互に描かれる。

<ストーリーは凱旋帰国するところから>

まず冒頭は、アメリカで音楽家（指揮者）として成功したスーティエンが中国に凱旋帰国し、北京空港に降り立つところからスタートする。彼女には北京での記念コンサートが待ち受けているが、20年ぶりに祖国に帰ってきた彼女には、生き別れた3人の兄弟を探し出し、再会するという大きな目的があった。スーティエンが兄弟と生き別れたのは7才の時。父母が不慮の死を遂げた後、4人はおじさんの家に引き取られたが、そこは兄弟の生活するところではなかった。しかしそこを逃げ出した4人兄弟の生活は甘くない。弟や妹たちの世話を義務付けられた長兄イクーの選択は、弟や妹たちをそれぞれ養子に差し出すことだった。まず1番小さいミャオは、隠居した人のよさそうな老夫婦の、そしてティエンは教養ある若夫婦の養子になることができた。そしてスーティエンの養親となったのは、ちょうどこれからアメリカに移住しようとしていた隣家の夫婦。それも、長兄のイクーが頭をこすりつけ、ありったけのお金を出して、どうかもらって下さいと頼みこんだ挙句のことだった。こうして20年前、兄弟4人は別れ別れになってしまったのだ。

<4人兄弟を演ずる子役たち>

イクー、スーティエン、ティエン、ミャオを演ずる4人の子役のうち、スーティエンを除く3人は3000人以上のオーディションの中から選ばれた子供たち。しかし丸々と太った、赤いホッペタとアピールする瞳が印象的な7才のスーティエンは、オーディションで見つけることができず、短編映画で1日だけ使ったことがある役者を起用したとのこと。それはともかく、この映画の主役は4人の子供たちといっても過言ではない。なぜならこれら4人の子役たちのアピール力がなければ所詮この映画は成り立たないからだ。そして

これら4人の子役たちはそれぞれにすばらしい味を出してこの映画の成功に大きく貢献している。

<4人兄弟の今は？>

主人公のスーティエンを演じる梁詠琪（ジジ・リョン）は香港映画界きっての美人スターだが、大陸映画に出演するのははじめてとのこと。父親の音楽家としての才能を引き継いでいたことと、アメリカへ移住した養親の教育が良かったことが相まって女性指揮者として大成功。そして、あの小さい時の丸々とした印象とは全く異なり、今や、すらりとした清楚なお嬢様風の美人音楽家に成長していた。

もう一人優秀なのは次男のティエン（夏雨 シア・ユイ）。子供の時、詩をそらんじて養親の若夫婦を感心させたティエンは、きっと養親も教育熱心だったのだろう、今は東北大学の学生として勤勉な学生生活を送っていた。

他方、1番グレていた（？）のは末娘のミャオ（陳實 チェン・シー）。今はすごい美人に成長しているものの、北京のディスコで踊りまくり、遊びまくりという荒んだ生活を送っていた。末っ子は一般的にわがままなもの。そういえば気管支炎で入院した時も、びんづめの果物が食べたいと駄々をこねて、両親を困らせていた。もっとも養親に預けられた事情は、1番小さいミャオに十分理解できなかったのもやむをえないが・・・。

だから今は成功しているスーティエンがミャオに対して応援を申し出ても、「今の生活に満足している。干渉しないで!!」と反発する始末。

そして、長男イクーはやはり1番苦労したようだ。今はタクシーの運転手をしているが今でも独身。新聞でスーティエンが凱旋帰国してくることを知ったイクーはこれに会おうとホテルにかけつけたが、そこで思わぬハプニングが……。ケンカの挙句相手の一人が車にはねられて死亡してしまったのだ。そのためイクーは今や警察の目を避けなければならない羽目に。しかしスーティエンのコンサートには必ず行かなければ・・・。

こんな成人後の長男イクーを演ずるのは姜武（チアン・ウー）。中国の名俳優姜文（チアン・ウェン）に似ていると思って後でパンフを見ると、姜文の実の弟とのこと。それを見て、そっくりな顔をしていることにもなるほどと納得。

<ラストシーンはコンサート会場>

今日はスーティエンのコンサートの当日。コンサート会場にはティエンはもちろん、今は仲直りしたミャオも駆けつけていたが、警察に追われているイクーの姿はなかった。指揮者として指揮台に立ったスーティエンは観客に向かって一言あいさつ。「今日は私の兄も

必ず来てくれると信じている」と。そしてスーティエンの指揮棒によって流れ始めた音楽は、亡き父が作曲した思い出の曲。

そんな中、会場にどよめきが……。警察官に連れられたイクーが会場に姿を現わしたのだ。演奏は一時中断。異常事態だ。とっさに引き返そうとするイクー。しかし会場を振り返ったスーティエンは、「兄さん行かないで！」と叫んだ。そして抱き合う2人の兄弟。コンサート会場はこの感動的な兄弟の再会を祝福する拍手に包まれていた。

あの日本映画の名作『砂の器』（74年）も、コンサートシーンが印象的でスクリーン上では、何回も何回も主人公が弾く美しいピアノ協奏曲が流れていた。これと同じほどのインパクトはないものの、この『再会』におけるラストのコンサートシーンも涙を誘う感動的なもの。そして劇場のあちこちですすり泣きの声もれる中、スーティエンが歌う主題歌『關於愛』が流れながらのエンディング。やっぱり映画はこうでなくっちゃ……。今日もいい映画を観ることができて幸せでした。

2003（平成15）年11月25日記